

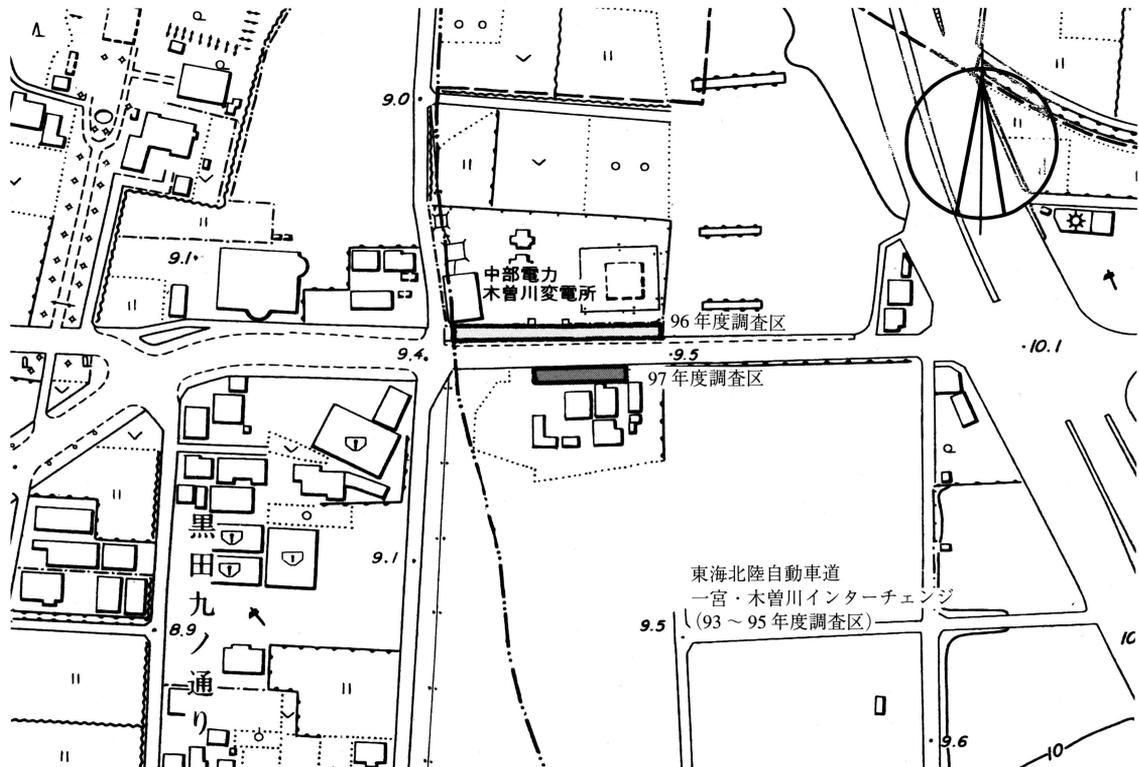
おおけいけだ
大毛池田遺跡

調査の経過 大毛池田遺跡は一宮市北西部から葉栗郡木曾川町北東部にかけて所在し、木曾川によって形成された標高約9 m前後の自然堤防および後背湿地上に展開する古墳時代から戦国時代にかけての複合遺跡である。本遺跡では平成5～7年度に東海北陸自動車道の建設に伴い約40,000㎡の事前調査が実施され、平成9年度には調査報告書の刊行もみている。

今回は県道萩原三条北方線の建設に伴う事前調査で、愛知県土木部より愛知県教育委員会を通じた委託事業として、平成9年11月に約150㎡の発掘調査を実施し、古墳時代前期の水田跡のほか、平安時代の遺構を確認した。

調査の概要 古墳時代前期の水田跡は第5層（暗紫色粘土層）において、畦畔の痕跡を平面的に認識することによって検出を行った。さらに上位の第4層（灰褐色粘土層）においても水田面が存在することが土層断面の観察によって確認されるものの、畦畔等は未確認である。第4層で確認される水田面は洪水性の堆積（第3層・灰白色極細粒砂）によって覆われる。

これらの遺構は大毛池田遺跡から隣接する門間沼遺跡の一部にかけて展開する広大な水田耕作地の一部分にあたるものであるが、本調査区においては小さな谷を境にして水田面が10～20cmの高低差をもつことが特記される。自然地形を巧みに利用しながらの水田造成が行われたことを表わすものであろう。また、谷は植物遺体が互層状に含まれる粘土で埋積され、その間層として極細粒砂が堆積することから、幾度かの小規模な洪水を経ながらも、比較的穏やかな環境のもとで水田が営まれたことがうかがわれる。



第1図 調査区位置図 (1:2500)

平安時代の遺構は第2層（灰色シルト層）で確認した9世紀後半～10世紀前半の竪穴住居1棟（SB01）、12世紀後半の溝1条（SD01）がある。調査区全体にかけて、近年の削平がかなり及んでいたため、遺構・遺物の検出はわずかにとどまった。

SB01は大部分が今回の調査区外にあたるため、その平面形については不明であるが、多量の焼土塊と炭化物、および被熱した拳大の礫数点を伴う深さ約20cmの掘り込みが竪穴住居の竈部分に相当するものと考えられる。竈部分からは灰釉陶器の椀・皿（第2図1～3）、土師器の甕（第2図4）が出土した。SD01は竪穴住居を大きく削平するかたちで北西から南東方向へと向かう。遺物の出土は希薄であるが、灰釉系陶器の椀（第2図5）が出土している。

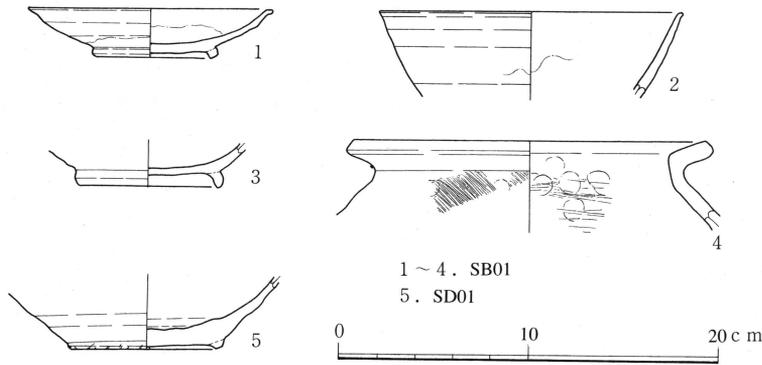


調査区全景（古墳時代の水田）

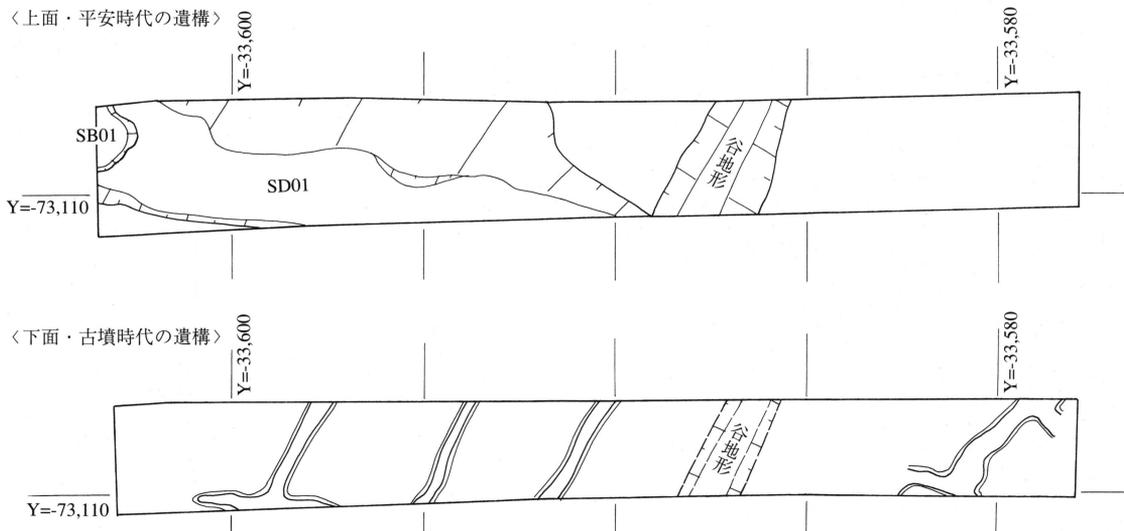
近接する93A区や94F区では大溝群の右岸域に展開する古代後期の居住域が確認されており、本調査区においても当該時期の居住域が及ぶことが今回の調査によって明らかと

なった。さらには若干の空白期間を経たのち、中世前期の段階には新たに開発が及ぶようになるということが理解される。

今回の調査で得られた上記の成果は従前の調査成果に追加・補足されるものである。（早野浩二）



第2図 出土遺物実測図（1：4）



第3図 遺構図（1：200）